

講演録

「学校図書館入門講座」～授業との連携を中心に～

講師 大澤 倫子 氏 (杉並区立桃井第五小学校司書)

1 はじめに

学校図書館問題研究会(以下、学図研)には、私よりも経験豊かな先輩方が沢山いらっしゃるのに、皆さんが期待される話が私にできるかどうか不安ですが、11年間働いた公立小学校の司書のひとつの実践ということで聞いていただけたいと思います。はじめに、杉並区の学校司書制度について話します。それから、司書の仕事のひとつの「授業との連携」の必要性を確認し、私が授業と連携することで見てきたことをお話したいと思います。

できるだけ事例を紹介し、授業支援をする時の流れや司書の動きなどから、授業支援をするための基盤づくりまでを話します。



① 杉並区の学校司書制度

杉並区は東京都の中央に位置しています。三鷹市と世田谷区と隣り合っている23区のひとつです。杉並区の学校司書は、2009年から6校～5校ずつ徐々に配置されていきました。小学校41校、中学校23校の全校配置は、2012年に完了しています。雇用形態は市のパート職員で、採用時に問われた資格は司書教諭か司書で

す。勤務は1日6時間、週30時間で、夏休みも勤務があります。

杉並区に特徴的なことは、学校図書館をサポートする学校図書館支援担当が、教育委員会の中にいることです。その方々の手厚い支援のもと、月に1回の学校司書全員を対象とした研修があります。また年4回は自由参加の基礎研修があります。最近行われた研修のテーマには、合理的配慮、選書の際の評価、レファレンスなどが取り上げられました。アニメーション、ストーリーテリング、パスファインダーの作り方、読書会の運営方法、資料提供の実践報告なども行われています。全校配置になって4年経ちますが、この研修のおかげで、新採用の方でも着実にレベルアップが図られていると感じています。ですから、先生方がどの学校に異動しても同程度のサービスが学校司書から受けられている状況になっていると思います。

② 勤務校図書館の概要

私が勤務する桃井第五小学校は、20クラスで、児童数は約590人です。区内では規模の大きい学校になります。2014年度の蔵書数は約11,000冊ですが、蔵書の比率が絵本と文学で半分を超えているので、改善を図っているところです。年間1人当たりの児童の平均貸出冊数は約44冊なので、多くはありません。調べ学習などの教科での利用は、日常的に使われています。

2 なぜ授業と連携するのか

(1) 学校図書館の目的

学校図書館には「教育課程の展開に寄与する」「児童または生徒の健全な教養を育成する」という大きな目的があると、学校図書館法に明記されています。東京純心女子中学校の遊佐幸枝さんは、著書『学校図書館発 育てます！ 調べる力・考える力（少年写真新聞社）』で、この2つの目的を次のように言い換えておられます。「教育課程の展開を寄与する」は「授業や学校行事を援助できる図書館」に、「生徒の健全な教養を育成する」は「生徒たちの読みたい知りたい気持ちを育み、応援する図書館」というようにです。

(2) 学校図書館の機能

この2つの目的を達成するために、学校図書館には3つの機能があると言われていています。文部科学省において設置された「子どもの読書サポーターズ会議」が平成20年に報告した「これからの学校図書館の活用の在り方等について」に、学校図書館の機能・役割が3つにまとめられています。ひとつは読書センターと学習・情報センターとしての役割。2つめは教員へのサポート機能。3つめはその他の機能です。その他の機能とは、子どもたちの居場所の提供であるとか、家庭や地域における読書活動の支援などです。

教員へのサポート機能とは、先生方が授業をより効果的に行うために、必要な資料を提供するという意味です。授業を支援して先生を支えるということが、子どもの“わかった”につながり、それがまた子どもの学びに直結する、それが学校図書館の大きな役割だと思えます。

3 経験年数で見えてきたもの

学校司書として授業との連携を重ねた11年間の経験の中で、その時々でいろいろ気づいたことがあります。

○司書1年目～2年目

東大和市で初めて学校司書になって1、2年目のころは、司書になれて嬉しかったので、やりたいことは何でもやりました。学校司書がいなかった学校に入ったので、本をきれいにしたり、レイアウトをかえたりという図書館の整備と読書支援が中心でした。授業との連携は、先生から依頼があった時に必要な資料を用意して提供する、それだけでした。学校司書から、こんな資料はどうですか？ という働きかけはしなかったし、教科書もあまり読んでいなかったです。

○司書3年目～4年目

東大和市も15校の小中学校があり、まず3人の司書が配置されました。その内の1人が私でした。その3人の司書が研究授業をやって、その成果によって司書の増員を図るかどうかが決めるという形が3年間続きました。そのおかげで、徐々に増員されて現在は全校に配置されました。

そんな中、研究授業に参加することがありました。どういう授業を見せるかというところで、3年担任の先生と相談して、ポップカードを作る活動をすることになりました。3年生では本の帯を作るというのは良くあったのですが、カードについては私も先生も経験がなかったので、「ポップカードとは何か？」というところから、指導案を一緒に作りました。これは、先生の授業づくりの過程が明確に見えて、いい経験になりました。

この頃、様々な学校図書館を使った研究授業がされ始めて、いろいろな学校図書館の見学に行く機会がありました。山形市の五十嵐絹子先生の朝陽第一小学校にも行ってきました。その見学もすごく勉強になりました。学図研の東京支部にも入会しましたが、敷居が高いと感じて最初は消極的参加でした。けれども、支部会に参加しているうちに学校図書館を活用した授業

の資料が集まり始めました。それを見聞きしている内に、「学校図書館指導計画」というものがあり、それがあるととても良いという印象を受けました。

○司書5年目～7年目

学校図書館指導計画を司書教諭と相談しながら作ってみました。そして先生方にも知らせたのですが、それを運用していける組織が学校の中にはなかったの、全く機能して行きませんでした。学校司書の思いつきだけでは、学校というのは動かない世界だと感じました。

ちょうどその頃に、学図研の全国大会が東京で開催されました。東京大会運営のお手伝いをしている内に、先進的な実践をたくさんされている優秀な学校司書の方々ともつながりができていきました。直接メールを送って資料をもらったり、問い合わせたりができるようになったのですね。それがとても良かったと思います。

ただ、いろいろやりすぎて学校図書館がどんどん使われるようになると、とても疲れました。当然オーバーワークで、この状況をリセットするために東大和市をやめ、杉並区に入りました。

○司書8年目～9年目

杉並の学校でも学校図書館指導計画を作りました。東大和市時代との大きな違いは、学校図書館支援室の存在です。支援室は司書教諭研修会で、指導計画を各校の司書教諭に作るようにと課題を出しました。そのため、学校司書が働きかけなくても、司書教諭からどう作ろうかと打診されたわけです。やりやすかったですね。これは大きな違いだと感じました。

司書教諭と計画の運用をどう円滑に進めていけば良いかと話をした時に、やはり校内の全ての先生を集めて図書館についての研修をしたいと、私が提案しました。以前から思っていたのですが、なかなかチャンスがなかったのです。そこで、すぐにやりましようとなりました。

この研修のときに、「学校図書館活用のための

職員研修」を配って説明しました。

この研修の目的は、先生に図書館の使い方を教えるのではなく、学校図書館指導計画はこのようなもので、計画に沿って図書館の活動はやって行くのだということを全ての先生と管理職に周知してもらうことにありました。

ですから、この目的が果たせるように話をします。今年度の研修では、先生方に昨年度はどういうふうに授業で図書館を使ったかをどんどん喋ってもらいました。指導計画表の一番左に「子どもたちが本を使う時にどのようなスキルが必要か」を提示して、真ん中が「こういう単元ではこういう調べ学習をする」があって、一番右には「教科書にはこういう単元があるからここでこういう本を読ませるといいですよ」というのが月ごと、単元ごとに書かれているものです。これを1年から6年まで作っています。

この計画は学校基本計画の中に組みこまれていて、何月にはこれをやりますと承認されているわけです。スケジュールの変更があるときは聞きますけれど、何でこれをやるの？と、先生に言われなくて済むのが大きいです。

○司書10年目～11年目（現在）

これまでは校務分掌の中の図書部は、司書教諭と図書担当、学校司書で3人体制でした。けれども、なかなか各クラスの先生方に連絡が行きわたらなくて、仕事量が私に偏り気味でした。それを改善するために、仕事を分担し、連絡がきちんと伝わる組織体制にしたいと提案し、今年から司書教諭と低・中・高学年から一人ずつ先生を出してもらって、学校司書を加えての5人でやることになりました。

○記録の見える化

私が異動しても、次に来た司書がある程度の流れが分かるようにするために、「記録の見える化」作業をしています。この記録の見える化を一生懸命にやるようになったのは、学図研埼玉支部の高校司書、宮崎健太郎さんがきちんと実

践を記録に残しておられるのを見て、やっぱり必要だと感じたからです。

4 連携・支援の流れと司書の動き

実際にどのように授業と連携をしているかを話したいと思います。授業との連携は、2つの段階があると思います。授業の導入段階での支援と、それから授業の展開段階での支援です。

(1) 授業の導入段階での支援

授業の導入段階では、先生が子どもに授業の動機付けをしたり、興味関心をもたせたりしますが、その時に、どう図書館の資料を使うか。具体的には、関連する本を紹介して下さいとか、読み聞かせをして下さいとか依頼されます。そのためにまず、図書館利用予定表を全ての担任の先生に配って、2週間分の図書館の利用予定を先生に書きこんでもらいます。

先生からの連絡と要望などを書いてもらって、図書館から出来ることや提案を書いています。資料4では、先生からの連絡欄に「国語のひとつの花に入るので、読み聞かせと本の紹介をして下さい」とあり、「6月13日の1時間目に学習発表会をします。パソコン等で調べた後で本も使います」と書いてあります。このように連絡のやりとりをしています。

けれども、この予定表だけで資料を用意するわけではなく、その先生に直接会ってレファレンスインタビューをして確認を取っています。何日の何時間目にやるのか、どういうことが書いてある資料が欲しいのか、導入段階ではどういことが子どもに伝われば良いのかなどのお話をしています。

ここで大事なものは、学校司書が何を言って、何を言ってはいけないかの確認です。導入段階の時には、先生は色々なことを思いめぐらして、子どもにどう気づきを持ってもらうかなどをすごく考えておられます。子どもの自発的

な気づきの部分までを、本の読みきかせや紹介で伝えてしまうと、先生が考えていることを台無しにしてしまいます。過去に私がそういう失敗をしたから、今そういう話ができるのですけど。だから本を見せて、ここは話さないほうがいいですか？と、慎重に確認しています。

もちろん、ぴったりくる資料がない時は公共図書館から借りてきますし、学校にない本は後日必ず購入して、記録を残すようにしています。

例えばこんなことがありました。理科専科の先生に「野菜にどれくらい水分があるか分かるのは何だっけ？」っていきなり言われたんですね。それを聞いていた家庭科の先生が、「食品成分じゃないですか？」って口添えしてくれて、「それぞれ、いろんな野菜のデータある？」と問い直されました。私は「理科年表にあります」と本棚から理科年表を持ってきて渡しました。理科年表を見たことがある方は分かると思いますが、すごく細かくて、小学生ではなかなか自力では使えない本です。でも杉並区の研修の時に、理科年表には理科以外のことも書いてあるので役に立つという話を聞いて、今年買ってみたいところでした。そしたらすぐに役に立ったわけです。

また最近多い事例ですが、先生が休み時間に図書館に来て、440の棚の前でうろうろされていたことがありました。「何かお探しですか？」と聞いたら、「オリオン座についての神話の絵本がないか？」と問われて、「いつ使いますか？」って聞いたら、「次の時間」って言うことでした。絵本タイプは学校図書館には無かったので、明日だったら公共図書館から借りてこられるのにも思いながら、短い神話が載っている大判のオリオン座の写真があったので、「これを教室のスクリーンで映しながら話したらどうですか？」と勧めました。「これでいけそうです」と持っていかれました。こんなことが多いです。

そういうケースにどれだけ対応できるか。た

だ、本棚に本だけがあってもだめで、先生が聞きたい時に、図書館に聞ける人がいるから出来る授業があるということだと思っています。

(2) 授業の展開段階での支援

①調べ学習

○連絡、相談を受ける

最初はやはり連絡や相談を受けます。先生からメモが来る時もありますし、こちらから年間指導計画を持って相談したりもしています。

○学習内容について知る

図書館に置いてある教科書を読んだり、指導書のコピーをもらったり、打ち合わせもしたりしています。また、先生が考えている授業の計画書やワークシートをもらうようにしています。先生が初めて試みる授業については、過去の他の先生が実施した資料や他校からもらったものを学校司書から渡します。

○資料を用意する

学校の蔵書と公共図書館、他校ともパソコンでつながっているのが相互貸借もします。資料を揃える時に気をつけているのは、先生が意図している授業に求められている内容がちゃんと書いてあるか、情報が探しやすい本なのかどうかということです。たとえば、目次と索引があるかとか、その学年の子どもたちが理解できるような内容になっているか、ルビがふってあるか、表現がどうか、この本を使って子どもたちが本当にワークシートに書き込めるのかのチェックになります。

○資料を提供する

パスファインダーとか資料リストを提供するときもあります。パスファインダーとは、情報の探し方のガイドみたいな意味なので、私は「調べ方ガイド」としています。5年のガイドは、司書が資料を集めて教室の方に持っていき、資料の使い方等も含めて説明しています。6年のガイドは、図書館で実際に必要な資料を子どもた

ちが抜き出して、それを教室へ持って行った時に配りました。6年のガイドには、NDCマークを載せています。どの分類の棚にどういう本があって、このキーワードだったらこの分類にいくと良いということ載せて説明しています。ですから、パスファインダーを配るにしても、その時の子どもたちの動きを予想して作りかえたりしています。

○調べ方の支援をする

短時間勤務なので難しいのですが、調べ方のレクチャーもしていますし、ITとして授業に入ることもあります。調べている様子を見て不足している資料も追加します。

○戻ってきた資料を再評価する

先生に「子どもたちはちゃんと調べられていましたか？」などを聞きます。子どもたちには、調べる時に付箋を貼っておくように言っていてそれは剥がさないで図書館に戻して下さいと伝えています。子どもたちが、どんなところに付箋を貼っているかを見るためです。

○情報をファイリングする（支援が見える化）

指導案、授業計画、ワークシート、児童作品のコピー、資料提供リストなどをファイルにとじます。使用したドキュメントファイル、PPTなどは、先生方が共通で見られる共有フォルダに入れるようにしています。

5年生の「わたしたちの“食”」という単元は、総合学習と社会科と家庭科と国語科を統合した授業です。ステップが1から22まであり、1年間を通して「調べる」という部分を図書館で支援して欲しいと話がきました。その前には国語科で、グラフと表の使い方を学ぶ単元があります。そこで、5年生には年鑑の使い方がまだレクチャーできていなかったのも、「年鑑の指導を先にした方が、子どもたちは資料をうまく使えんと思います」という話をして、この単元の前に年鑑の指導を図書の時間でやりました。

この単元で作った本のリストですが、単元が

終わった後で購入した本もあります。私の方で、使える本の評価をしています。それでも、どうしても資料がないという子どもには、「おたすけカード」を書いてほしいと言っています。

このときには「和食を食べると体に良いことがあるらしい」を調べている子から、「明確に書いてある本がない」とおたすけカードが出ました。『ニュース年鑑』と『ポプラディアネット』に、和食が世界遺産になったときの記事があったのですが、どのように体に良いかは書いてありませんでした。そこで『日本食の大研究』を公共図書館から借りてきて渡しました。こんなおたすけカードがあると、その後のフォローがしやすいです。

この授業は、成果を発表することでまとめになりました。子どもたちは、紙に自分が調べたことを書いて、それをプレゼンします。この発表の授業は見に行くことができ、記録のために写真を撮ったりしました。いつもこんなに大々的な調べ学習をやっているわけではありません。一番多いのは、依頼があって、図書の時間に資料を紹介して、子どもがその本を読んで、その後に教室で実際に調べて、成果物を作成する、というパターンです。

授業支援の際には、先生と話をする時の難しさなのですが、たとえば6年生は3クラスあっても、3クラスの先生が同じことを考えながら授業をやっているわけではありません。たとえば6年生の「平和について考える」の授業でも、同じ資料提供をして欲しいと言っても、ひとつのクラスでは「読み取りで精一杯だから、新聞記事みたいなコンパクトな資料がたくさん、いろいろあったほうが良い」と言われました。もう一方の先生は、「紛争関係だけに絞って欲しい」と言われたので、先生はコピーした理解しやすい資料を配布し、それを共通の土台にしながら授業を進めました。同じ学年だから同じ資料で

良いかということ、決してそんなことはないですね。だから、話はそれぞれ聞く必要があるということです。

先ほどの資料のファイル化ですが、写真のインデックスが貼られたひとつのケースが、授業支援のひとつの単元です。授業で使ったものや他校の実践事例、去年のものや一昨年のを全部、ひとつのケースに取りあえず入れておきます。なかなか整理する時間がないので、とにかく同じ場所に入れておいて、またやるときに取り出して使うというふうにしています。

② 読書材を活用した授業支援

調べ学習ではない展開の段階でも、アニメーションやPOPを作ったり、ポスターを書いたりということもやります。先生向けの図書館だよりで「図書館のちらし」を時々出しています。

5年生の「千年の釘にいとむ」の単元の時に、あるクラスはポップを書き、別のクラスはポスターを描き、また別のクラスは本の帯を書いて成果発表をした授業がありました。このレクチャーを図書館でしました。

③ 先生を楽にする授業支援

本校の図書館は2月に引っ越しをし、先週オープンしたばかりです。だから、1月と2月はずっと引っ越し作業でした。その最中に、突然に先生が指導書を持ってやってきて「情報ネットワークという単元で、教室で情報ネットワークの話を10分した後、図書館がどうやってネットワークで結ばれているかというのを話してほしい」と言われました。

社会の教科書には、長野県の小学校の図書館ネットワークの事例が載っているので、杉並区はどうなっているのかをパワポで説明し、他校の本を検索してみせたり、国会図書館をクリックして検索したりなどをやりました。先生が楽に授業をしたい時には、できるだけ図書館がお

役に立てれば良いと思っています。

④ 研究授業への支援

研究授業に参加すると勉強になります。司書教諭に研究会で授業を見せなきゃいけないので何かないと問われて、ブックトークを勧めました。私もやったことがなかったのですが、学図研の会員でブックトークってやっている人の資料を貰っていたので「資料があるから多分できます」と伝えました。指導案作りから参加し、ワークシートの作成、練習から本番まで参加しました。

また1年の生活科で、指で形を作ってスクリーンに映して見せる「影絵あそび」をやりました。これを研究授業でやるということで、先生は初めに本屋に行かれました。でも本が本屋に無かったのに、学校図書館には10冊くらいあったので驚かれました。公共図書館でも探して後ほど渡しました。その資料が返却されたときに、かわいい付箋のメモが本についていて、「影絵の本、ありがとうございます。子どもが太陽の動きまで調べたいと言うほど、活用することができました」と書いてありました。こういう付箋もコミュニケーションの大事なアイテムだと思いました。

⑤ 情報活用への支援

やはり本があっても調べられなかったらなんの意味もないので、それを調べられるようにすることが図書館の支援だと思います。

図鑑・百科事典の引き方、引用の仕方、奥付からの出典の書き方、年鑑の使い方、著作権の問題、説明文を読むなどのことが、小学校の国語の単元に組み込まれるようになりました。

でも説明文というのは、進んで読むことが少ないので、あえて図書の時間に「説明文を読む」というテーマで読書をしたりしています。

5 授業と連携するための基盤づくり

(1) 蔵書の構築

授業と連携するための基盤づくりは、やはり本を揃えておく、そして使いたい時にすぐ使えるようにしておくということだと思います。ネットワークも使って、とにかく資料を探して渡すことが基本です。どれくらい本があると良いですかって先生に聞くと、150%と言われます。人数が10人いたら15冊ということです。

資料の再評価をすることも大事だし、小学生には難しいかなと思う本でも、他の人にいろいろ使える方法を教えてもらう情報交換も役に立ちます。

(2) 体制づくり

先ほども言いましたが、指導計画があってもそれを運用していく組織がなかったらなかなか動きません。学校全体の共通理解になっていなければ運用はできないので、授業の連携がうまくいくかどうかというのは、60%くらいはコミュニケーションの図り方にかかっていると思います。コミュニケーションを図るためには、図書館のちらしみみたいなものを配って一生懸命アピールすることも必要ですし、図書館利用予定表などのアイテムを使うというようなことが必要です。

また、学校の基本的なところを知るというのも大切です。たとえば、校務分掌を知るとか、毎月の学年だよりが必ず自分のところに来るように働きかけておくとか、そういう情報を得るというのも大事だと思います。さらに新鮮な情報をいつも貯めておくことが必要だと思います。

(3) 司書の学び

いろんな勉強会、いろんな本、いろんな情報を得られるようにすることが大切です。でも、焦らないことが大事です。先生と協働できるようになるには、時間がかかります。実践を1学期にひとつやるとか、一年間にひとつやることでも積み重ねていけば、ある程度まとまった実

実践になるので、とにかくやってみようと思う時にやってみてください。

司書はサービス業です。どんなに突然に、どんなに理不尽に言われても、頭の中では？マークとか！マークがいっぱい渦巻いていても、一応にっこり笑うことも必要です。

また、自分をほめて、これがひとつ出来たから次もがんばろうと、自分の気持ちを支えるのも大切です。私も杉並の研修などで、いろいろな方の話を聞くと落ち込むことはたくさんあります。でもとりあえず、聞いたことを頭の引き出しにしまっておいて、何かの弾みで必要にな

ったときに引き出しを開けてやってみようと思っています。でもその引き出しが空っぽだったら、大事なチャンスの時に何もできないことになるので、しまう作業を心掛けています。



「つながるって広がる！～学図研入門～」

講師 鳴川 浩子 氏（玉川聖学院司書教諭）

ちょこっと自己紹介

司書教諭と紹介いただきましたが、専任・専門・正規の教育職で採用されている学校司書だと思って下さい。授業は一切担当していませんし、部活も担っていません。ただ図書委員会の顧問はしていますし、校務分掌も幾つかはありますが、ほとんどが図書館に関係ある役割です。9月から採用だったので、約14年と半年勤めています。

学校図書館の団体

関係団体は全国にたくさんあるのですが、だいたい大まかなものをご紹介します。私は、学校図書館問題研究会（学図研）には大学4年生の時に入りました。学校図書館で働きたかったので、どの団体に加入していれば就職に有利になるかをいろいろ調べました。でもJLAとかSLAとかよく分からないので、聞いて勧められた学図研に入りました。実際いろいろありすぎて、調べても分からなかったのが私の正直な気持ちです。現在はJLAとSLAにも入っています。

●日本図書館協会（JLA）

JLAは会員が約7,000で、学校図書館部会があり、約430名の部会員がいます。図書館全体のことを俯瞰しながら、学校図書館部会が学校図書館のいろいろな研究集会を開いたり、全国の事例や今日的な話題を取り扱った分科会を全国大会でもったりしています。図書館関係のことがニュースになると、部会長の回答などが新聞に出てきています。また、機関紙『図書館雑誌』が出版されていますが、数年に1回は学校図書館の特集が組まれています。

●全国学校図書館協議会（SLA）

正式にはJがつくそうです。『学校図書館』という雑誌を出版していて、基本的には学校単位での加入で、地域ごとの組織もあるようです。学校単位で加入しているので、教員の方々が中心を担っている印象があります。ただ、学校司書の会員も増えているようです。

●親子読書地域文庫全国連絡会（おやちれん）

これはかなり歴史があって、隔月で『子どもと読書』を発行されています。本の情報を知ることができます。

●学校図書館を考える全国連絡会

97年の学校図書館法改正の時に、地域で活動されている市民の団体が交流する場所として創設されています。

●ぱっちわーく

“全国の学校図書館に人を！の夢と運動をつなぐ情報交流紙”と銘打った雑誌を発行されています。ほんとにいろいろな情報が豊富に掲載されています。

●図書館問題研究会

図書館全般のことを扱っている研究会です。この団体に在籍していて、学校図書館を中心に研究をしたい人たちが集まって出来たのが、学図研です。

●学校図書館プロジェクト・SLiic（スリック）

ホームページのなかに動画がいろいろあって、ブックコートフィルムのかけ方とか、オリエンテーションの実演などの実践的なものが見られます。学図研の東京支部会員が大勢かかわっている団体です。

●学校図書館活用データベース

東京学芸大が作っているものです。授業での利用の実践が豊富に見られます。校種別に調べられるようになっていて、教員と学校司書の実践の両方が掲載されています。

●その他

図書館情報学会、日本図書館研究会（NAL）、学校図書館教育研究会など、いろいろあります。

●学校図書館問題研究会（学図研）

会員は620名、現在40都道府県に会員がいます。個人加盟の研究会で、19の支部があります。月に1回、情報誌『学図研ニュース』を発行し、実践の交流を図っています。パンフレットを作ったり、要望書やアピールなども出したり、国会でのロビー活動もしています。

最近では、少年ジャンプの作品の中に学校図書館利用者のプライバシーが守られていない描写があったので、出版社に学図研の考えを申し入れたりしました。また、村上春樹さんの個人情報公開されたことについての見解も出しました。

私は、『学図研ニュース』の編集長を3年間務めました。東京支部が最後に編集したものは、「電子書籍」をテーマに取り上げていて、会員以外からも原稿をいただいたりしています。支部持ち回り連載の「授業と図書館あれこれ」という欄では、島根支部にSSH（スーパーサイエンスハイスクール）とSGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定校の実践を書いています。

他には、日常的なことを紹介してもらう「リレーエッセイ」や、おすすめの本を紹介してもらう「400字書評」の欄もあります。イベントの案内もありますし、参加報告も載せます。たとえば、福島支部で行われた「スタートガイドでお悩みの解消」というイベントの報告、三重での近畿ブロック集会、熊本での研究会の内容なども読めるようになっていきます。支部で出し

ている支部報の目次を紹介していて、連絡をすれば購入ができます。

ちなみに、次号の特集は「学校図書館の合理的配慮」です。そういう、ICTやアクティブラーニングなどの今日的なテーマから、オリエンテーションや図書委員会の活動などの日常的なものまでを今後は取り上げる予定です。全国各地の情報が仕入れやすい会だと思えます。

年に1回全国大会もあり、大会の報告集は『かくと』と言います。昨年のは埼玉で、図書館情報大学名誉教授の竹内さとる先生の講演がありました。学校図書館とはどういう場所なのかという基本的な話を分かりやすく話して下さいました。その他、実践報告が2本あり、分科会とナイターなどで行われた協議内容などがまとめられているので、報告集を読むだけでも勉強になります。また『学校司書って、こんな仕事（かもがわ出版）』や長野支部の編集した『サンカクくんと問題解決！学校司書・司書教諭・図書館担当者のための学校図書館スタートガイド（少年写真新聞社）』という出版物もあります。

学図研東京支部

全国的につながるのに加えて、やはり顔が見える者同士でコミュニケーションをとることも大事です。私が勤務する学校は、中学と高校で1名ずつの司書教諭が配置されていますが、先輩が長らく産休に入ったために、暫くは一人ぼっちでした。ですから、学図研の東京支部を紹介してもらった時は、月に1回の定例会で精神的に支えてもらえて、すごく助かりました。基本的には、定例会は各学校の図書館を使っていますので、見学ができるメリットもあります。東京支部はHPもありますし、支部報『NEWS—GAKU—TO—KEN』も出しています。最新号では、おすすめの本の紹介を載せたりしています。メンバーリストに、ほぼ全ての支部員が入っていて、「学校の先生からこんな聞かれた」「ち

よっと本が足りない」というようなレファレンスがたくさん流れています。至急とか、助けて！のようなメールでも、皆がパッと対応してくれ、自分たちの情報を簡単に共有することができていて助けになります。

つながって広がる！

情報交換は「授業で使ってもらえない」とか、「本返してくれないとか」という愚痴みたいなことからスタートして、コミュニケーションを図っていくうちに、お互いの実践を見たり聞いたりして、さらにそこから実践報告を紙面などでまとめていくことが多いです。私は理論的に考えるタイプではないのですが、冷静に振り返ってみると、ちゃんと段階を踏んでいたと整理でき、それを発信していくとさらにステップアップが出来たと感じます。顔が見える範囲からさらに大きなところにつながる、またそれを糧に学内でもつながる、それが自分の実践を広げる可能性を生むのだと思っています。

私の学校図書館の事例を紹介します。以前はラベルを本の下から1センチのところに付ける決まりがあったのですが、大事な情報を隠してしまうので、兵庫県の学校図書館見学で教えてもらった最後の4桁目が見えるやり方（縦貼り）に変えました。見えなかったら意味ないですし、岩波ブックレットなど貼れないですね。



また、展示の棚だったら、100円ショップで3つ買ってきて、三角にして結束バンドでつないでみました。これも兵庫の方から習いました。



展示の表示の題字は大きくしたほうが良いと神奈川県の方に教えてもらいました。同じように、分類の番号も大きく書いて表示しておく、混み合うときは「3に行け！」とか言えて便利だし、生徒にも分かりやすいと教わりました。

また、英語の基礎講座のCDとかが多分大量に捨てられていると思いますが、表示板に活用したりしています。



高校生のために今日的な時事問題のコーナーを入り口のところに作っていて、開催されている展览会とか美術館の案内もおいてあります。これも兵庫の方にどうやってもらえるのかを聞いたら、「電話したらくれる」と言われたので、そうしたら本当にもらえました。また、新刊本

は背表紙をコピーして外に貼っているの、ひまつぶしをしている生徒がよく見えています。



ラノベなど巻数が多いものをティッシュ箱にいれ縦に排架しています。3倍も本が収納できます。これも教えてもらいました。



先生向けの通信も出しています。夏休みの課題として「複本借りてきますよ」とか、「さすが高校生、情報の集め方に感心しました」とか伝えて先生に親しみをもってもらおうようにしています。

私の学校では、中学生に論文を書かせますが、事前の指導をしていないので、生徒は参考文献の書き方もわからない状態でした。やきもきし

ながらも、他の学校で作成している論文関係のものを集め続けて、かなり工夫して冊子を作りました。

そのなかで紹介している情報カードも、参考文献が3つ書けるようになったものがあったので、それを真似する形でオリジナルのものを作りました。やはり情報を普段からもらっていたから出来たのだと思います。

先ほど紹介された埼玉県高校司書の宮崎健太郎さんが作成した、授業支援の記録シートももらっています。時期や時間数など記入しておいたものをフォルダに貯めておいて、学年ごとに保管します。そうすると次の年に先生方に参考にしてもらえます。一人だけでやっていたら、絶対に出来ないことです。自分から積極的に全国大会などに出て行って、つながっていくことによって、たくさんものを貰って活かしている、活かしているから学校図書館を生徒たちが使ってくれて、先生たちも使ってくれていると思います。良い循環ができていると思います。

学校図書館って？

ただ「学校図書館ってなんだろう」と迷って、ぶれそうになる時もあります。図書館が学校の中にあることによる教育的な意味はすごく大きいのですが、やはり学校の中の教育施設なので、図書館の自由が狭められるようなこともあります。

たとえば、貸出履歴などのプライバシーは、守られないことが多いです。けれども、学校でプライバシーが大事にされた経験があるからこそ、生徒は社会に出ても大事にされたいと思うし、大事にすることができるのだと思います。学校の中で、教師集団に囲まれていると、図書館の概念が通用しなくなってしまうことがあります。そんな時に、同じ意識を持っている人たちと会い、学校の中に図書館のあることの意味が再確認できるのも貴重なことです。